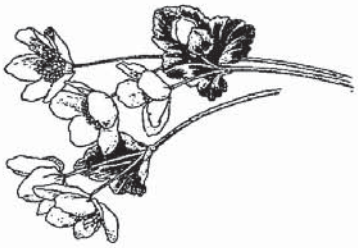

最後の「邂逅忌」を迎えて

小林孝吉

「邂逅忌」。それはプロテスタントの作家椎名麟三が、「復活のイエス」との出会いによって書くことのできた小説『邂逅』に因んだ名称である。第一回「邂逅忌」は、椎名麟三の亡くなった翌年一九七四年に、渋谷駅前の東急ゴールデンホールで開催された。

明治学院の二年の頃であろうか、病院で死を宣告された砂川安太という青年労働者に訪れた「自由」と「激情」を表現した『永遠なる序章』と、私は生きることのむなしさのなかで震撼的に出会った。その二年後、私はまだ名前もついていなかった最初の椎名麟三を偲ぶ会に参加したのだ。

狭い会場は、埴谷雄高など戦後文学を代表する作家、評論家でいっぱいだった。私は一読者として、会場の片隅でそんな文学者の集まりの昂ぶった雰囲気をはだで感じていた。その日、参加者の総意で偲ぶ会は「邂逅忌」と命名された。そのとき、未完の長編『死霊』を書きつづけていた埴谷雄高は、今後「邂逅忌」では若い批評家や研究者による椎名論の発表と、椎名作品をもとにしたミニドラマなどの上演を行い、「邂逅忌」をたんに故人を偲ぶ会にすることはやめようと提案した。その「邂逅忌」は今年で第三六回目を迎え、それ

「邂逅忌」との関わりでは、私は富岡幸一郎氏などとともに、何回か「邂逅忌」で椎名論の発表をするとともに、ここ十数年間は会の世話人として、私自身の生涯を変えた椎名麟三の文学とともに歩んできた。

ちょうど、世話人になった少し後のこと、私の職場に一本の思いがけない電話が入った。それはキリスト教研究所の所長をされていた、私には一面識もない橋本茂先生からであった。橋本先生は、私が椎名麟三と格闘し、二〇年かけて書いた『椎名麟三論―回心の瞬間』をすでに読んでおられ、キリスト教文化研究プロジェクトで、椎名研究をはじめようと誘ってくださったのだ。

私としては椎名麟三論を出版したことで、すでに椎名研究から離れていたときだった。この電話によって、再び私は椎名研究へといっきょに引き戻されるとともに、実存的作品からキリスト教文学へと変貌していく、いわば「復活体験」以後の椎名麟三の文学と本格的に向き合うことになった。キリスト教研究所で、土曜日の午後を定例に、すでに何十回と研究会が重ねられた。

発表者は、橋本先生や私、協力研究員の丸山義王氏をはじめ、作家の森禮子、成井透、評論家の松本鶴雄、井口時男諸氏など、演劇関係者も含む数十名にもおよんだ。それとともに、「邂逅忌」も明治学院の記念館に会場を移して開催されることになった。ミニドラマ「半端者の反抗」、「天国への遠征」の朗読劇、作家の小川国夫、加賀乙彦、評論家の寺田博、川村湊各氏の講演が行われ、「邂逅忌」ではいつも、椎名文学と参加者の魂とが響き合うように感じられた。

一方、このプロジェクトの責任者で、「邂逅忌」の世話人となっていただいた橋本先生も、「邂逅忌」とともに、三月で定年退職されることになっている。私はこの三六年間を想い、どこか一抹のさみしさとほっとした安堵感とをひそかに感じている。

私自身はこのプロジェクトを通して、「回心」以後の椎名麟三の文学を『キリスト教文学の誕生―椎名麟三論』というかたちで出版の準備をしている。それも、あの橋本先生からの運命的な一本の電話のおかげだと思う。私の文学への入り口となった『永遠なる序章』の主人公は、数日後の死を前に、こう自らにいう。――今日一日の生活をはじめなければならない、そして人類は長い歴史を通じてそうしてきたのではなかったか、一日一日にはじめ、永遠にはじめ、たとえはじめることのなかに滅ぶのが人類の運命であったとしても、と。この言葉に、どれほど励まされたことだろう。

最後の「邂逅忌」は、これまで上演したドラマやエッセイの朗読、椎名文学における復活と自由をめぐってのシンポジウムなどの企画を予定している。椎名麟三の文学は、未来に向かって、未来者のために永遠に開かれている――。

（こばやし　こうきち　協力研究員）